共時的解釈の構造

荒　木　正　見

1

小論はテキストを共時的(synchronic)に解釈することの基本構造を考察するものである。

今日われわれが使用する共時的およびその対立概念としての通時的(diachronic)という語はソシュール(Ferdinand de Saussure)に倣るところが大きい。『一般言語学講義(Cours de Linguistique Générale)』では言語を対象にしながら，両語は次のように区別される。まず，共時(synchronie)は「学の静態的側面に関係し[1]」，共時言語学(la linguistique synchronique)は，「共存し体系を形成する諸辞項を関連づける論理的および心理的関係を同一の集合意識によって知覚されるがままに取り扱う[2]」と述べられる。これに対して，通時(diachronie)は「進化と関係あるものすべて[3]」であり，通時言語学(la linguistique diachronique)は，「同一の集合意識によっては知覚されず，また相互の間に体系を形成することなく次々と置き換わる継起的辞項の関係を研究する[4]」と述べられる。

ソシュールは以上の規定をもとに，言語体系を捉える視点は静的でなければならないとして，共時言語学の優位を説くのであるが，ここではまず，種々の事柄，とりわけ芸術的作品を解釈しようとする際に，今日むしろ一般的である通時的解釈が，基本的にどのような構造をしているのかを簡単に考察してみたい。ソシュールの規定をそのまま適用するならば，通時的解釈の典型的なものは，テキストの歴史的地理的成立状況の諸関係を研究

する，ということになろう。しかし，解釈という語を厳密にとろうとする小論の立場からは上の研究の目的を次のような図式に重ねて考える。ソンタグ (Susan Sontag) は，やや否定的な口調で，「解釈するということは，現象を表現しなおすこと，要するに，その現象にふさわしい相関物を見つけることである[5]」と述べるが，テキストについて何かを語ろうとすれば図式的にはすべて表現しなおすことという宿命を負うことは言う迄もない。問題はその相関物が，テキストそのもの，換言すればテキストの本質的意味であるかどうかである。小論では，解釈という語をこのような本質的意味を記述することを目的とする行為ととる。従って，通時的解釈は，例えばテキスト成立当時どのような意味を持っていたのか，それがどのように変遷してきたのか，また，テキストの作者はどのような状況にあったのか，等ということを，或いは文献学的に，或いは伝記学的に考察することによって，テキストの本質的意味を推論しようというものであると言える。即ち，通時的解釈は，単なる通時的事実の集積ではなく，それらを正確に，また緻密に捉えることによって，テキストの本質的意味を露わにしようという企てであるといえる。

これに対して共時的解釈は，解釈である以上，「現象を表現しなおす」という基本構造を持つことは言うまでもない。更にそれがテキストの本質的意味を露わにするという意図のもとに遂行されることも当然である。しかし，共時的解釈においてそれらのことはどのように位置づけられるのであろうか。

2

共時言語学について述べられた先の規定を共時的解釈の一般的規定として読み換える際に注意しなければならないのは，ソシュールがいかなる視点からそのように述べたかという点である。共時的言語学の課題は言語の静態的状態，ある時点で使用されている言語状態の構成要因を明らかにすることである。その最も典型的な例が一般文法である。

この視点を共時的解釈における一般的な視点とするならば，厳密にはその視点はただ一点しかあり得ない。それは，現在，すなわち「いま」である。この「いま」とは，テキストを意識が捉えたその瞬間であると、事実としては記述できる。しかし，「テキストを意識が捉えた」という事態とは

なんであろうか。

考察の端緒たる上記の事実を正確に記述すれば，なにものかが（イメージであったり，感動であったり，単なる名前であったりするなにものか），意識に生じている。そのなにものかについて解釈する意図を持つならば，そのなにものかはテキストである。ロトマンは，ある種の実在を，不安定で主観性が感じられる概念，理念，意味づけといったものに対立させてテキストと呼ぶ傾向に反対する[6]が，小論に於る上の記述からも同じことが主張できる。すなわち，意識の表象像を実在として確定すること以前に解釈は開始されるべきものであるし，解釈の対象こそがテキストだからである。

では，このテキストを共時的に解釈するというのは何をしていることなのか。または，目的としての本質的意味に到達できるのか。

共時的解釈の典型的な方法として構造分析(analyse structurale)が挙げられる。それは一般的には，テキストに含まれる基本構造に着目して，基本構造が当のテキストではどのような構成をとっているのかを分析するものであるとされる。この方法が，構造的パターンのはっきりしている民話の研究者たちによって発展せしめられたのは当然のことであった。民話に於る構造分析の先駆者たるプロップは，登場人物の行為，つまり機能（function）に着目して，主に魔法民話を機能のパターンによって分類した。[7] それによると，プロップは経験的に魔法民話に関する四つのテーゼを挙げて，自らの「モルフォロギア」の出発とする。そのテーゼは，(1)民話における不動の要素は，誰がどのように行為したかにかかわらず，登場人物の機能がこれに当る。(2)知られている魔法民話の機能の数は限られている。(3)機能の継承性は常に同一である。(4)すべての魔法民話は，その構成からいうと，ひとつのタイプで成り立っている。(1)(3)については後述するが，(2)に関しては全部で三十一の機能が列記される。また(4)に関しては次の図式で表わされるものだとされる。

$$\text{A B C} \uparrow \text{Д Г Z R}\left\{\begin{matrix}\text{Б}\\ \text{З}\end{matrix}\text{К}\begin{matrix}\text{П}\\ \text{Р}\end{matrix}\right\}\text{Л} \downarrow \text{П}_{\text{р}}\text{—С}_{\text{п}}\ \text{Х Ф У О Т Н С}$$

この図式に記される記号はそれぞれ次の機能を表わすものであるとされ，ストーリーはほぼ図式の順に従って展開するとされる。

A—敵対行為。加害行為。敵が家族のひとりに害や損失をもたらす。

B—仲介・連結のモメント。不幸あるいは不足が知らされ，主人公に頼んだり命令したりして，かれを派遣もしくは放す。
C—始まった反作用。探索者が反作用と合意もしくはこれに踏みきる。
↑—出発。主人公が家を後にする。
Д—寄与者の第一機能。主人公は試練され，訊問され，攻撃を受けるなど，それにより魔法の手段あるいは助手を受ける。
Г—主人公の反応。主人公は将来の寄与者の行為に反応する。
Z—調達，魔法の入手。魔法上の手段は主人公の自由になる。
R—二つの王国間の広がりある転置，道案内。主人公が探しているもののある場所に，運ばれ，あるいは連れて行かれる。
Б—戦い。主人公とその敵が直接戦いに入る。
З—難題。主人公に難題を課す。
K—照準，標印。主人公が狙われる。
П—勝利。敵が勝つ。
P—解決。課題がとかれる。
Л—不幸もしくは欠落の除去。初めの不幸もしくは欠落が取り除かれる。
↓—帰還。主人公が帰る。
$П_p$—迫害，追跡。主人公が迫害を受ける。
C_n—救い。主人公の救出。
X—気づかれない到着。主人公は，気づかれることなく家もしくは他国に到着する。
Ф—根拠のないみせかけ。にせの主人公が根拠のないみせかけをする。
У—判別。主人公が気づかれる。
O—暴露。にせ主人公や敵，加害者が暴露される。
T—姿の変更。主人公に新たな姿が与えられる。
H—罰。敵が罰せられる。

さて，我々は今日、この(2)(4)に関する民話学や神話学の研究が，更に複雑な展開を遂げていることを知っている。とりわけ，(4)に示された基本的な図式に匹敵するものとして，レヴィ＝ストロースの有名な図式 $f_x(a) : f_y(b) = f_x(b) : f_{a-1}(y)$[8]が想起される。また，プロップに対して直接の修正を加えたグレマスの基本図式（1965～1966発表）も無視するわけにはい

かない。しかし，それらの詳細な比較研究は、当面フォークロアの研究者に委ねておき，小論では，それら諸形態の成立根拠を探求していきたい。

ここで我々はプロップの四つのテーゼのうち,(1)と(3)を顧ることにする。上に述べられた(2)および(4)のテーゼの方法的基礎が(1)であり(3)である。(1)は行為としての機能を構造の基本単位とすることを強調するテーゼである。この場合機能は，ストロースがそうしたように関数として解される。いかなる登場人物がその関数の変項に代入されようと，関数そのものは変化しない。また(3)はその関数の通時的不変化性を述べたものであるといえる。

特定の基本単位がテキストに含まれている仕方，しかもその基本単位は通時的不変化性を持つ，従って露われてくる基本単位のテキストに於ける構造は共時的構造である、といった事態は構造分析に於ては最も基本的な方法論的基礎を為す。と同時に，機械的な構造分析が時として陥りがちな独断への危惧から，テキスト分析への流れを辿ろうとするロラン・バルト（Roland Barthes）の方法に於てもそれは同様に言うことができる。バルトはジュール・ヴェルヌの小説の分析を例示して，その方法の序章を呈示する。[9] ここで基本単位はコード（code）と呼ばれる一種の概念である。それは修辞的或いは文体的読み取りによって，テキストそのものを流れる幾本かの概念の筋として捉えられるべきものである。しかも、その概念の筋は必ずしも同一レベル上にあるわけではないので，上位コード，下位コードといった位層を持つものとして理解されなければならない。その場合各コードは民話に於て通時的不変化性を持つ機能と同じレベルで論ずるわけにはいかない。バルトにおいてコードは一方で時代を超えた象徴的意味を持つ（言語で表現される以上当然である）が，他方ではそのテキスト特有の意味を有するからである。しかし，この後者の場合も「いま」「ここに」在るテキストに倣り，文体，修辞，力動，等々の構成的性格からコードが設定されるのであれば，やはり共時的性格を持つと言えよう。

以上のことから，テキストを共時的に解釈することの意義を推論してみれば，次のようなことが言えよう。まず，前提としての基本単位の問題がある。それは,「機能」を例にとれば，メタ言語としての「機能」の成立の有効性の問題と，列記さるべき諸機能の有効性の問題とが浮び上がってくる。しかし，その両者とも，共時性を巡る問題としては同一の構造を持つ

問題であるといえる。即ち，いずれの有効性も，分析の方法として使用される以前に，テキストそのもの，或いはそのテキストの属するテキスト群から、帰納的に確認されなければならない性格のものである。この帰納的確認には，テキスト解釈の妥当性に関して肯定的意義と否定的意義の両面が指摘できる。肯定的意義は，テキストの本質を我々が直観できるならば，そこから導かれる前提的基本単位はテキストを解釈するのにきわめて有効であるということである。勿論，テキストの本質を我々が十全的に(adäquat)直観することができるのなら，我々はテキストを解釈する必要がない。本質については後に詳しく考察するが，ともあれ我々は本質を捉えるにはあまりにも有限な個的対象にかかわっているし，かといってテキストの本質的意味を全く理解していないとは言い切れない微妙な緊張関係に於てある。従って否定的意義は，その帰納的確認が，場合によっては単なる恣意に流れて，本質から遠避かっている可能性を指していると言える。

しかし，この否定的意義は，テキスト解釈に於る構造分析の遂行過程に於て修正され得る。実際には構造分析は基本単位によって展開された構造の意味を論理的に読み取るところに，本来の意義を見出す。[10] その際，論理的不整合が生じたならば，或いはもっと感情的に，一応説明できたが納得できない、という事態が生じたならば，その原因は読み取りの際のミスでなければ，前提としての基本単位の設定が誤っていたということになる。前提としての基本単位に関して述べられた以上の問題は，テキストの形式的構造に関するものに限らない。メタ言語としての「機能」と，諸機能とについては既に述べたが，バルトに於る上、下位コード，また登場人物，具体的行為，等の，関数としての構造に相対的に与えられる変数としての内容的要素にもそれは当てはまる。仮に一箇のリンゴがテキストに現われたとする。それは，シンボル辞典に列記されている諸々の意味を担っていると同時に，当のテキストの全体構造の中で特定されねばならない意味を担っているはずである。いずれもが共時的性格を持つと言い得るが，テキスト解釈ということであれば，前者を踏まえた上で後者に集約させねばならない。この場合，先に述べたような論理的感情的裏付けが要求されるのは明らかである。

このように，共時的解釈は通時的解釈とは直角に交わる「いま」「ここ」という地平に於て，テキストの本質を論理的に説明しようとする試みであ

るといえる，そして，「テキストを意識が捉えた事態」というのは，事態的には上記の諸構造が混然として象徴的に意識に現われていることであり，それを反省的に述べていけば諸々の諸構造や諸要素が記述されてくるということである。では，それでテキストの本質が捉えられるのか，それが次の問題である。

3

テキストが存在する。解釈はまずテキストを前提的に考察するところから始まる。次に，テキストに於て共時的に捉えられ得る内容や構造を見出して，それらを手懸りにして本質を求めていくのであった。

では，これらの作業が可能であるのは，テキスト，共時的内容や構造，そして，テキストの本質という三つの事柄相互の関係がどうなっているからなのか。まずそのうち，テキストと共時的内容や構造との関係については前節に述べられた通りである。

では，テキストと本質との関係はどのように考えればよいであろうか。まず，解釈さるべきテキストは個別態としてそこにある。個別態とは，特殊な要素と普遍な要素とが併存している状態である。解釈しようとする我々は，解釈すべき「事実（Tatsache）」をとりあえず個別態として捉える[11]。事実は偶然的であり，特殊なものとして我々には現われるが，厳密に言えば事実が持つとされる偶然性や特殊性は，我々自身の認識の不十全さに帰するものである。或るテキストの普遍性，それは本質にとって必要条件であるが，その普遍性は我々自身の個人的認識を超えるものとして規定されるべきものであった。フッセルは『イデーン』に於て「本質（Wesen）」という語を二種類に使い分ける。[12] 第一は，「或る個物（Individuum）の個物固有の存在において，その個物がなんであるかということ（Was Vorfindliche）」であり，第二は，「理念（Idee）へと置かれる」在り方である。フッセルは前者を認識する仕方を「経験的もしくは個的直観（Erfahrende oder individuelle Anschauung）」と呼ぶが，そのような個的直観における問，即ち，その個物がなんであるか，という問に対してその答として見出されてくる内実はすべて，後者，即ち「本質直観（Wesensanschauung）」もしくは「理念を観る作用（Ideation）」へと転化できると述べ，後者の学的優位を示唆する。このこともまた，個的直観は認識の特

殊性を帯びたものとして理解し，本質直観がその特殊性を排するものとして理解すべきである。このようにしてあらゆる意味に於て特殊性が排されたとき，現われる普遍態は本質と呼ばれ得るものである。

では，この本質は，テキストに対して精神的緊張をもって「本質直観」するだけで得られるのか。指向性を念頭におくハイデッガーの循環規定[13]はそれに楽天的な見通しを与えてくれるかもしれない。しかし，既に述べてきた通り，解釈は説明による置き換えという宿命を持つ。我々はいまやテキストと本質の間に何らかの技術的媒介を置くことにより，一層厳密な理解を必要とする場に立っている。その媒介が通時的事実や共時的内容なのである。

では共時的内容はどこに存在するのか。その第一の解答は，テキストそのものに在るというものであった。しかしまた同時にテキストは上記のように本質との重層構造を為すものでもあった。ここで考察さるべきは共時的内容や構造と，本質との関係である。この両者がテキストとの性質上の差異を共通に持つ点は，ともに普遍的性質を持つものであるということである。普遍的性質を持つもの，それは認識論的には間主観性（Intersubjektivität）によって構成された実在である。[14] その共通の地平に於ける両者の関係は，共時的内容や構造が，本質を構成する要素，もしくは本質を構成する側面であるということである。このように，共時的内容や構造は，テキストを構成するものであると同時に，また本質を構成するものである。

共時的解釈は，テキストと本質を結ぶこのような共時的内容や構造を媒介としていることが明らかになった。それはまず，テキストにおける共時的要素の選択に始まるが，共時的内容はテキストの内容であると同時に本質の内容でもあるのだから，この選択は本質直観を要求される。ここには，解釈学上の歴史的課題としての，テキストそのものを感じるがままに捉えることと，テキストに特定の前提をもって当たりそれですべてを説明しようとすることとの対立の融和の一端が開かれている。本質的直観とは，テキストそのものを感じるがままに捉えることであり，またその後に遂行される共時的解釈の技術面だけを言えばテキストに特定の前提をもって当たるということになる。そして，構造分析に於て見られたように，共時的解釈は最後の読み取り，もしくは綜合的解釈に於て改めて本質直観が要求される。即ち，解釈は常に論理的説明をもって遂行されるが，その場合，事

実相互間のずれ，とりわけ説明と，直観的印象との矛盾が生じた時には，解釈は未だ中途でしかないはずだからである。

ところで，このような解釈の仕方は，テキストと本質との間に解釈者自身自らを夾み込むという構造を持つ。この構造は，認識論的な面と，存在論的な面の双方から述べられねばならない。前者については次のように述べられる。解釈という行為は，自らの表象としてのテキストのうち，特殊な側面を排し，そこに見えてくる共時的構造や内容（これらはとりも直さずテキストがテキストとして認識されることに対する超越論的構造や内容であるが）を媒介にして，本質的な表象を発生せしめるという構造を持つ。また，後者については次のように述べられる。解釈は，実在としての個別的なテキストに含まれる普遍的実在としての共時的構造や内容を媒介にして，それらによって構成される本質的実在を説明する。もちろん この二つの構造は同一構造 の二側面であることは言うまでもない。

さて、小論に於て残された問題，提起された問題は数多い。それらは具体的なテキスト解釈のなかで一層厳密に考察されていくべきであろう。それが筆者にとっての当面の課題の一端である。(15)

(1982. 1)

註

(1) Ferdinand de Saussure: "Cours de Linguistique Générale", 117p.

(2) ibid. 140p.

(3) ibid. 117p.

(4) ibid. 140p.

(5) Susan Sontag: "Against Interpretation", § 3 この評論でソンタグは解釈という行為を厳しく批判するが，形式分析等を高く評価していることからもわかるように，作品そのものに密着した方法を主張する。ソンタグはそれを解釈ではない，また，作品がなにを意味しているかを示すことではない，と言うかもしれないが，小論の立場では，本文で述べるようにそれらすべてが構造的には解釈であるとする。

(6) Yu・M・ロトマン：〝文学理論と構造主義〟（磯谷孝訳），127p.

(7) ウラジーミル・プロップ：〝民話の形態学〟（大木伸一訳）

(8) 記号及び構造式は次のように説明される。a，bは二人の行為者を表わすが，そのうちaは純粋に否定的な機能xと結びつき，bは肯定的機能yと結びつく。bは更に，否定的機能xを取り入れることもでき，xとyの媒介になることができる。ま

た，bが否定的機能を取り入れるならば，肯定的機能yはaではないがより発展的な何者かによって実現される。

(9) Roland Barthes: "Par où commencer?", "Le degré zéro de l'écriture" 所収。分析対象は，ヴェルヌの『神秘の島』。

(10) この点に関しては筆者は既に『「解釈」と「形式」』(梅光女学院大学論集第14号所収）で論じた。

(11) フッセルはこのことを次のように述べる。「(経験という）認識作用は，実在的なものを、個別的なもの (individuell) として定立する。」(Edmund Husserl: "Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie", Erstes Buch, § 2)

(12) E. Husserl: "Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie", Erstes Buch, § 3

(13) Martin Heidegger: "Sein und Zeit", S. 152-S. 153.

(14) 従って，存在論的には両者ともに客観的実在である。筆者は，フッセルの「間主観性」の概念を，機能としての作用性のみに限定し，作用性そのものの存在は「客観的実在」であると解する立場をとる。

(15) 筆者はその試みとして『哲学と昔話—解釈学的方法論』梅光女学院大学公開講座論集第8集（1980年10月発行）や、『異常の構造—カフカ「変身」の構造分析』梅光女学院大学公開講座論集第11集（1982年6月発行予定）、ほかに執筆している。